指標化システムを用いた患者難易度表示の有用性について

採血業務の質と安全性の向上をめざして

◎吉田 裕子[1)]、中尾 隆之[1)]、佐藤 雅美[1)]
国立大学法人 徳島大学病院[1)]

【はじめに】当院中央採血室は2019年1月に採血業務支援システムを更新し、採血受付周辺の混雑緩和や待ち時間の短縮に取り組んできた。今回指標化システムを用いた患者難易度表示の有用性について検討したので報告する。

【機器】採血業務支援システム（小林クリエイト株式会社）に搭載されている指標化システムを用いた。

【対象と方法】2020年10月～2021年2月に採血担当の臨床検査技師を対象に採血業務支援システム内の採血データを解析した。患者難易度は指標化システムによって前回採血の穿刺情報と患者情報をもとに簡単Ⅱ、普通Ⅲ、困難Ⅳ、超困難Ⅴの4段階に難易度判定される。各採血者は採血前にコメントラベルで患者難易度を確認し自己判断で患者を選択可能となる。特に新人技師は難易度が高い患者を避けることができる。患者難易度判定は2020年12月15日に実装した。患者難易度判定実装前2020年10月～12月と実装後2021年1月～2月の刺直率や交代率などの比較検討を行った。

【結果】刺直率は実装前と実装後で0.5%低下、交代率は0.3%低下した。採血所要時間については実装前と実装後では約3秒短縮した。採血者をベテラン、中堅、新人にカテゴリ分類し実装前後を比較すると刺直率では中堅で11人中8人、新人で12人中8人が低下した。交代率は中堅8名が低下していた。採血所要時間は中堅、新人で6秒程度短縮した。

【まとめ】採血業務の質と安全性を向上させるためには、採血の失敗や合併症がない、また患者が不安や嫌悪を感じない採血室を構築することが必要と考える。今回の検討では、患者難易度表示することで刺直率や交代率が低下し、患者に安心感を与えられる採血室に近づくことができた。また患者難易度表示による効果が見られない技師を抽出することができ基本的な採血技術の再指導が必要であることがわかった。今後も指標化システム内を活用し、信頼される採血技術や採血室の安全性の向上をはかり患者満足度を高めていきたい。

連絡先 088-633-9300